

井上円了の教育観

祖父 江 章 子

学祖井上円了博士の教育観について博士の多くの著述中、ここでは『教育宗教関係論』（明治二十六年、一八九三）と『教育的世界観及人生観』（明治三十一年、一八九八）の二書を主として用いた。これらの著述における学祖の教育に対する見解の紹介を主とし、それらを理論と実際の二つに分けて考察し、次いで哲学館、現東洋大学の教育目標を井上博士が奈辺に置いていられたか、を私なりにまとめてみたいと思う。

一 教育の理論

(一)教育の意義　これについて学祖は(1)「勿論教育の関係する所は甚だ広漠にして単に知識のみならず情感にも意志にも又肉体にも関係するものなり然れども其主とする所は知識開発にありと言ふを得べし」(『教育宗教関係論』、四十頁)と説かれている。(2)「教育の意義に広狭の二種あり、狭意の教育は一定の目的を以て有意的に人を教化するものを言い、広意の教育は有意と無為とを問わず直接なり間接なりすべて人生感化変成する力ある

ものを言う、即ち日月星辰、山川禽獣の如き是なり」(『教育的世界観及人生観』、十一頁)と述べられている。

上記の(1)の中で情感以下の文は(2)の広意の教育に、(1)の知識の開発は(2)の狭意の教育に、それぞれ相応すると思われる。

(二)教育の種類 『教育宗教関係論』四一頁〜四二頁に述べられている学祖の説を簡単にまとめると次の表になる。



(心理学に属す)

以上のうち教育本来の目的は心育であり、体育は「心意の発達を期せんが為に其身体の育成及び健康を謀るを以てなり」(同書四二頁)と述べられている。

さらに『教育的世界観及人生観』において学祖は第四節(九頁)から第十五節(四十頁)にわたりいろいろな教育の種類について詳細に論じておられる。それらを前のようにまとめると、

(1)自然的教育

- | | |
|-----|-------|
| 第一類 | 天文、気象 |
| 第二類 | 地形、地質 |
| 第三類 | 植物、動物 |

第四類 人間社会（次の(2)以外のもの）

(2) 人間的教育

家庭教育

学校教育＝直接

朋友教育＝間接

(3) 精神的教育

上記(2)の人間教育に関し、学祖は教育を目的とするものではないが、教育上に重大な影響を与えるものとして、①工業及美術、②政治及宗教、③風俗及儀式、の三をあげておられる。

なお上記(2)の直接、間接の意とは別に、間接とは母親の胎内⁽³⁾にいる間、直接とは出生後に受ける教育のことで、前者は即ち胎教であり、後者は①天然の教育、②人為、③装飾、④地位、⑤名称の教育等々である、と記されている。

(三) 学校の種類 『教育宗教関係論』七五頁以下に述べられている学校をまとめると、(一)内は筆者が補なつた。

(1) (授業内容からみると) ①専門、②普通、③実業、④学理を講ず、の四。

(2) (教育の対象は) ①幼年者、②壮年者、③女子に限る、④盲啞に限る、のこれも四。

(3) (設立者別では) ①官立、②公立、③私立、の三。

次に『教育的世界観及人生観』一〇頁では前述の教育の種類と同じく次の三に分けられている。

(1) 自然的学校

(2) 人為的学校

(3)精神的学校

学祖が分類された学校の種類は、教育の意義のうち、狹義の意、即ち学校教育の学校だけではなく、現代的に言えば、生涯教育、社会教育の範疇にまで及ぶと考えられる。

(5)教育の目的 『教育宗教関係論』の所々に述べられている教育の目的に関する文は、

（教育も宗教も）「其目的とする所に至りては一なり即ち真理に本きて人心を目的とするに至ては一なり故に其講究は共に哲学によらざるへからず」（六四～六五頁）

「教育も宗教も共に人心を目的とするものにして其の中教育は心の現象上に關係し宗教は心の本体上に關係す」（三九頁）

「今之を心の上に就て言へば教育は人の成長と共に次第に変化する心象に基づき宗教は終始不變なる身体に基づく既に教育は變化する心を取るを以て現在一世を目的とし宗教は不變の心に本つくか故に広く過去未來に亘りて三世に相關す」（五十頁）

「抑も教育の目的は一個人の心意を開発して完全なる人物を作るにあり而して其人にして完全なるときは之に由りて組織せらるる国家も亦完全なるへし故に教育は完全なる一個人を作り以て国家を益するものなり」（二七～二八頁）

上記の学祖の所見をまとめると、教育宗教共に基本は真理で、目的は人心である。従つてその講究は両者とも哲学によらなければならない。そして教育は同じ心でも現象上に關係している。故に教育は人の成長と共に變化する心象に基づいているので現在一世を目的とする。次にこれは教育の種類の所で引用したが（251ページ及註2）教育本来の目的は心育にあり、最も關係が深い学問は心理学である。その心育は一人一人の心意を開発して

完全なる人物を育成するにあり、そうすれば個人の集合体である国家の利益になる、ということになる。学祖の言われる完全なる人物の条件の一つとして、「教育は此世界に対して道德を守らしめ以て完全なる人物を作らんとし……」（五一頁）と、道德を守ることがあげられている。これは如何なる時代においても変らない教育の目的であると思う。

次に『教育的世界観及人生観』における教育の目的について学祖は、「家庭教育、学校教育、朋友教育は教育其物を目的とするものなり、就中前二者は直接にして朋友教育は間接なり」（二四頁）と述べられている。本書中教育の目的について直接ふれておられるのはここだけである。これは本書が教育家、特に小学校の教諭を対象として著わされたことに因るのである。

教育の実際

ここでは教育の実際について前項に関連しつつ、(一)教育の対象、(二)教育家としての基本的条件と心構え、(三)学校教育、に分けて学祖の考えを見てゆきたい。

(一)教育の対象　対象は言うまでもなく人間である。これについて学祖は「凡そ天地の間に目に見、手に触るもの実に幾億万なるや殆ど数量の及ぶ所にあらずと雖も、人類より貴重なるものなく人間より靈妙なるものなきは余が言を待たざる所なり」（『教育的世界観及人生観』、一頁）と述べられている。

(二)教育家の条件と心構え　前項(一)教育の種類と(五)教育の目的で述べた通り、教育本来の目的は心育にあり、最も関係のある学問は心理学である。この心理学の研究が実際の教育に及ぼす効用について学祖は、「然らば其学

は如何なる關係を教育の上に与うるかと言ふに心理学は智情意の性質規則を攻究するものにして其結果を實際に適用するものは教育なり即ち心理学は理論にして教育は応用なり故に心理学の講究は教育を実施するに欠くへからざる學問なりと知るへし」(『教育宗教關係論』四一―四二頁、註2の引用文に続く)とされている。さらに『教育的世界觀及人生觀』の第三節(六―九頁)において學祖は、教育家自身の識見が高くかつ大なる場合は今は逆境にあつても心に余裕があり、従つて徳性も品格も自然に其人の身に備わるので「故に教育家たるものは先ず其識見を進むるを肝要とす」(六頁)と述べられている。

これは教育家の識見が高まれば、その人¹に接する人たち―特に理論よりも感化の影響を受け易い児童生徒―が、教育家(教諭)の言行を模範として自然の間に良い影響を受けるからである、と言われる。前項の教育の目的の引用文(253ページ)で見たように教育は現在一世を目的とする。しかし上記の感化は教育家自身が他界したとしても、その感化は單にその人自身の家族だけではなく、教え子たちの精神上に連動して後世に伝わる、と説かれている。

次いで教育家は天地自然を代表して社会の子弟を教育する大任を負っている天職であるから、一度教育界⁵に身を投じた以上、終身教育に従事する決心をもたなければならない。一時の腰掛けのつもりで教育に従事するならば最初からならない方がよい、と述べられている。

くり返すことになるが、教育家としての条件と心構えは、(1)心理学を研究し、教育の現場で實際に応用する。(2)自身の識見を高める。(3)一生教育の仕事が続ける。の三点になる。

(三)学校教育 学校はいかなるつとめを持っているかについて學祖は、「教育は主として学校の任する所にして宗教は寺院教会の司とる所なり教育の国家に必要なは何人と雖も熟知する所にして敢て余か言を待たす」(『教育

宗教関係論』、九二頁）と言われている。さらに『教育的世界観及人生観』では「人間的教育は先に示せるが如く家庭教育、学校教育、朋友教育の三種あるも其中心となり模範となるものは学校教育なれば……」（三八頁）と説かれている。

この学校教育を自然教育と比較すると、自然教育の方は、(1)目的を有し、(2)方法を取捨し、(3)人（被教育者）に利あるものを採ぶ、の三点が教育者である自然の方で主体的に決定することはできない。これに対して学校教育は上記の目的・方法・選択の三点を教育家自身の意志、判断によって自由自在に取捨適用することができる。「故に学校教育は教育の本領にして人知の発達に最も力あるは勿論なりと雖も、若し其用ふる所の原料、其具する所の体質を考ふるに一として自然より其供給を仰がざるはなし」（三九頁）とされている。

学祖が説かれた所をまとめると、学校の任務は教育にある。その教育は家庭教育を初め他の教育の模範となり中心となるものである。これを自然教育と比較すると、学校教育の方は教育家自身が、教育の目的方法などを取捨選択できる。しかし根本的なものは自然から供給されている、ということになろう。自然との関係は、(一)教育家の条件と心構え、の所でふれた「教育家は天地を代表して社会の子弟を教育する大任……」という学祖の説と関連があると思われる。

まとめ

ここでは学祖井上圓了博士が東洋大学の基礎である(一)哲学館を如何なる目的、方針及び主義をもって設立されたか、次いで(二)学祖の教育観、についてまとめてみたい。

(一) 哲学館の教育について

(1) 目的 学祖は護国愛理の二大目的を達成するには教育と宗教を振興しなければならない、その實際上の應用が哲学館創立である、とされた上で、「而して哲学館の目的とする所は文科大学の速成を期 広く文学史学哲学を教授するにあるも就中教育家、宗教家の二者を養成するにありて其方針とする所は教育の方は日本主義を取り宗教の方は仏教主義を取ることをなせり」(『教育宗教關係論』三十頁)と述べられている。

(2) 方針及び主義 上記の引用文で明らかのように、哲学館教育の方針と主義は日本主義である。その所以は我国は独立国である、というのが理由の一つであり、学祖は外遊から帰国後哲学館を改良して日本大学を開設する計画があり、「是亦余か護国愛理の二大義務に關係する者にして教育と宗教との本原に遡りて其主義を明にせんと欲せば其国固有の学を専修する路を開き以て学問上根柢を確定せざるへからず我国固有の学は国学漢学仏学にして日本大学の目的は此三学の専門科を設くるにあり之を要するに余の教学に關する事業は大小種々あれども總て護国愛理の二大目的を實行するに外ならざるなり」(『教育宗教關係論』三二頁)と述べられているので明らかであろう。

なお哲学館教育のもう一つの主義について学祖は『圓了漫録』(明治三十六年、一九〇三)中、(九)哲学館教育の主義で「蓋し辛抱は実業の本となるのみならず、百事の基なれば哲学館教育の主義を定めて辛抱主義となさんとす、」(十一頁)と説かれ、主義を定めた上はまず自分自身が率先躬行すべきであるとして、「故に余は哲学館創立以来今日に至るまで、己れの身に修めたるものは辛抱の二字に外ならず、願くは本館に在学せるもの、亦よく此二字を服膺して本館教育の主義を實行せられんことを。」(同前)と学生にも辛抱を勧めておられる。

以上をまとめると、哲学館、即ち東洋大学の目的は教育家と宗教家の養成であり、その主義は日本主義と辛抱

主義の二本立て、であると思う。ただし学祖が唱えられた日本主義とは、日本古来の長所を助長發展させ、短所を自覚し矯め直す、という意味で、所謂国粹主義とは明確に一線を画す、と私は考えている。

(二)井上圓了博士の教育観 学祖の教育観は学校教育のみを考えておられず、広意の教育、即ち家庭教育、実業教育から博物館、美術館等の施設、さらに地形、気象等の自然現象まで幅広く教育に関係があるものとして捉えられている。このことは学祖の『欧米各国政教日記』（明治二十年、一八八九）と『西航日録』（明治三十七年、一九〇四）を見ても、訪れた地域の学校、教会はもとより博物館、工場等の施設、地形などくわしく記述されていることから推察できる。なぜこのように広意の教育を考えられたかを当時（明治二十年～四十年、一八八七～一九〇七）日本が直面していた国際環境から見てみたい。維新以後近代化の道を歩んで来た我が国が、日清戦争（明治二七～二八年、一八九四～一八九五）、三国干渉（明治二八年）、日英同盟（明治三五年、一九〇二）を経て日露戦争（明治三七～三八年、一九〇四～一九〇五）へ進んだ多事多難な時代であった。このような時代的背景が、「凡そ吾人は国民として護国の義務を負うものなれば此点より考ふるも教育を盛にするは吾人の責任たるや論を俟たず今日我邦にして西洋諸国と対等の交際を為し対等の条約を締結せんとするには先づ国民の位地を高め彼と同等の資格を有たしめざるべからず而して国民の位地を高めんとするには必ず教育に依らざるを得ず……」（『教育宗教関係論』二一～二二頁）と、学祖をして言わしめた一因であると考ええる。

一方、国内の一般庶民はというと、「我邦今日表面には文明国を装ふも、多数の人民は無学無識にして、恰も五里霧中に迷ひ居るが如し、而して此人民が知識の眼を開くにあらざれば、真実の文明を見ること能はざるは明かなり、故に学者たるものは必ず四千余万の蒼生を以て己れの心とし、其知識を啓発するを以て己れの任とし、共に進み並ひ行かんことを望まざるべからず、」（『圓了漫録』二六頁）とあるように、また「余は我邦今日の欠

点は無形上の文明の未だ進まざるにありて之を進ましむるは教育宗教を改良するにあり而して教育宗教の改良は之に従事する人の知識と道徳とを進ましむるを知る……」(『教育宗教関係論』、百四頁)と記されている如く、外見上は文明開化によって行燈がガス燈に、駕籠が人力車に、というように甚大な変化を遂げても、精神的には未だ学祖が二度の外遊で親しく見聞された西欧諸国の国民の意識に及ばなかった、と推察される。それ故に、教育は学校に限らず、幼にしては家庭教育、そして義務教育修了後は、各地の寺院が青少年教育、社会教育を受持つという、広意の教育を考えられたのではないか、と思う。

註1 以下引用文は原文のまま、書名と内容の要約は当用漢字を用う。

2 251 ページ11行〜12行の引用文に続き、「故に教育の最も関係ある者は心理学なり」とある。

3 『欧米各国政教日記』、四六頁

4 『教育的世界観及人生観』、五六〜五九頁

5 前掲書、四頁以下

6 同前、三八〜四十頁

7 『教育宗教関係論』、二八〜三十頁

8 前掲書、三十〜三二頁

9 『圓了講話集』、二二五頁